

# 海外との比較から見た日本の大学生における 無気力の一考察

林 雅 子

## 1. 問題と目的

無気力とは何か。英語で無気力に該当するapathyの語源は、古代ギリシャ語の「a- (否定) + pathos (激しい感情) + -ia (こと)」であり、「激しい感情がないこと」を意味する。一般的な定義としても、興味や感情の喪失を示すことが無気力であるとされている (Marin, 1991)。何かをやろうとする気力が無いというよりは、何物にも感情を動かされないという、心理的な面での定義づけがされていると言える。

日本において、無気力の研究は大学生を中心に行われてきた。国立大学を対象とした実態調査では、休学・退学理由で最も多いものが勉学意欲の減退・喪失といった「消極的理由」であることが報告されている (内田, 2009)。海外における大学生の学業のみに意欲の減退を示す事例 (Walters, 1961 笠原・岡本訳 1975) を日本の大学生にも当てはめ、そうした怠学傾向をスチューデント・アパシーと称し、研究が進められるようになった。スチューデント・アパシーの特徴として、学生の本業である学業には意欲の減退を示す一方で、サークルやアルバイトなどには積極的に参加するという選択的退却があると指摘されている (笠原, 1977)。つまり、日本の無気力研究では、特定の何かをやろうとしないことが無気力として捉えられている。大学生の無気力は、発達上におけるアイデンティティの拡散や時間的展望の無さによるものとして考えられたり (笠原, 1977; 小此木, 1979; 大島・石津, 2015)、家族や友人、教師といった周りからのソーシャル・サポートによって改善されることが示されたりするなど (福岡, 2000; 下坂, 2001; 中間・松田, 2012)、これまで様々な事柄との関連が研究されてきた。

しかし、日本の無気力研究は、「一般学生のアパシー化」が示唆され (土川, 1985)、大学生なら誰にでも起こり得るものとして定義や対象に広がりが見られている (笠井・村松・保坂・三浦, 1995)。一方で、「日本の大学生は、かなり特殊な状況に置かれて」 (下山, 1995) いるという見方があり、スチューデント・アパシーは、「日本の文化、社会に深いかかわりを持つ障害として日本で独自に研究が進められて」 (山形・繁梶, 2003) いる。そのため海外の無気力との比較は少なく、大学生の無気力研究に限れば、李 (2000) が日韓の無気力傾向と親の養育態度を比較検討したのみである。研究に広がりが出た一方、その視野は限定的であると言える。

以上のことから、本研究では、Walters (1961 笠原・岡本訳 1975) の報告を出発点に、海外と日本における1960年代から現在に至るまでの無気力研究の流れを整理し、違いの比較を試みる。それにより、日本の無気力研究の特徴や位置づけを明らかにし、今後の研究

の発展と深化に寄与することを目的とする。

## 2. 海外における無気力研究

ハーバード大学保健センターの精神科医であったWalters (1961 笠原・岡本訳 1975) は、一過的な状態とは異なる、慢性的な無気力状態を示す大学生がいることを、精神医学的診療の事例から取り上げている。こうした大学生の無気力はスチューデント・アパシー (Student Apathy : S・A) と名付けられ、その特徴として、1) 男子に起こること、2) 下級生であること、3) 勉学に対する意欲が無く、大学生生活の継続が脅かされる段階になってようやく周りに気づかされるといったことが挙げられている (Walters, 1961 笠原・岡本訳 1975)。日本の大学生の無気力に関する概念を明確化する際にも、S・Aの概念が翻訳され、適用された (笠原, 1977)。そのため、大学生の無気力に対する出発点は、米国と日本で共通している。無気力に対する認識も、男子大学生特有の、学業にのみ選択的に意欲が減退するものとして統一されている。

しかし、米国では、Walters (1961 笠原・岡本訳 1975) 以降、S・Aに関する研究の展開はされていない。当時の米国は、ベトナム戦争に対する大規模な反戦運動や、公民権運動、女性解放運動といった様々な機会の平等を求める運動が活発に行われていた。それに影響を受け青年の間には対抗文化が広がり、大学生の無気力もそうした政治運動の文脈で扱われるようになった (Altbach, 1979)。WaltersのS・Aが意味する無気力とは異なる。米国社会の大学生には、S・Aは注目を引くほどの広がりを見せなかったのではないかと推測されている (下山, 1996)。

次に、海外において無気力に関する研究として注目を集めたのが、Seligman & Maier (1967) の学習性無力感 (Learned Helplessness : LH) である。これはイヌを対象に無気力になるメカニズムを明らかにしたものである。実験において、イヌを回避群、ヨークト群、統制群にわけた。まず、回避群には統制可能な電気ショックを、ヨークト群には統制不可能な電気ショックを与えた。統制群には電気ショックは与えられなかった。次にシャトルボックスにイヌを入れて、電気ショックの回避反応を観察した。その結果、回避群と統制群は回避反応をすぐに学習したが、ヨークト群は2群に比べて有意に学習に失敗した。LHとは、ヨークト群のように、自分の行動が結果に結びつかないという非随伴性の経験を繰り返すことで、その後の自分の行動で結果を変えられる場面でも、最初から行動せずに諦めてしまうというものである (波多野・稲垣, 1981)。Seligman & Maier (1967) はイヌを対象としていたが、類似した実験を行い、人間にも同じ現象が起きることが示されている (Hiroto, 1974)。その後人間がLHに陥るメカニズムの再現性を高めるために、LH理論にさらに原因帰属理論を取り入れた改訂LH理論が登場した (Abramson, Seligman & Teasdale, 1978)。Abramson et al. (1978) は原因帰属の次元として内的 (Internal) — 外的 (External), 安定的 (Stable) — 不安定的 (Unstable), 全般的 (Global) — 特定の (Specific) の3つを仮定し、その中でも、内的 (自分のせい), 安定的 (いつでも), 全般的 (どんな場面でも) に帰属すると最も無気力が生起しやすくなると主張した。非随伴性の経験をした際に、必ずLHになるというわけではなく、原因と結果の帰属の仕方に影響されるという考え方である。

以下、図1に無気力の程度の重さと、誰にでも見られるものかどうかで、LH理論における無気力とS・Aにおける無気力を分類した。改訂LH理論は、その後、絶望感型うつ病の構成要素として取り上げられている (Abramson, Metalsky & Alloy, 1989)。ネガティブなライフイベントに直面した際に、ネガティブな結果と無力感を予期することで、抑うつになるという考え方であり、動機づけの低下や、悲嘆の感情が現れるといった症状が見られる (Abramson et al., 1989)。つまり、LH理論における無気力は、うつ病における症状の一つであり、該当患者にだけ見られる特徴である。それに対して、S・Aは、選択的な退却であり、うつ病と類似した症状を見せることもあるが、感情の希薄化など、S・Aの主要な特徴をうつ病という言葉で表すのは適切ではないとしている (Walters, 1961 笠原・岡本訳 1975)。父親との確執がある男子大学生にのみ起こるといった限定的な要素を持つものの、LH理論に比べれば、より程度の軽い無気力であると考えられる。したがって、LH理論における無気力と、S・Aにおける無気力は異なるものであるということがわかる。

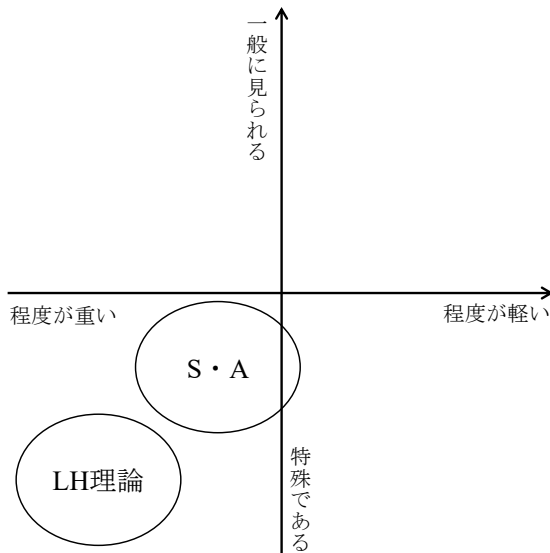


図1 1960～80年代における海外の無気力の捉え方

その後、無気力は興味や感情の喪失を示すものであり、神経症によっても引き起こされ、症状としては精神的苦痛や知的障害、意識レベルの障害によらない一時的な動機づけの低下が見られると定義づけられた (Marin, 1991)。個人の精神疾患が無気力につながることで、その症状が動機づけの低下という点で、LH理論における無気力と同じ捉え方をしているということが言える。同著者を含む無気力に関連する最新の文献では、アルツハイマーや統合失調症、前頭側頭欠損患者の症状として無気力を捉えており (Clarke, Ko, Kuhl, Reekum, Salvador, & Marin, 2011)、2010年以降の他の文献でも、無気力は「神経障害及び精神障害にしばしば見られる自律的な目標立てや動機づけられた行動の減少を示す」(Kos et al., 2017) ものとして定義づけられている。

S・Aについては、同じ用語を使用していても、Waltersの概念とは異なる内容である。

教育方略の改善を論じるためのものや (Dable et al., 2012), 政治に対する無関心さを指すもの (Fox, 2004) として用いられている。Walters自身も著者の検索した限りではS・Aの再論はしておらず、1961年に定義づけられたS・Aはその後海外では展開されていない。1990年代以降論じられる無気力研究は、LH理論に続くものであると言えよう。

図2に、現在の海外研究における無気力の捉え方を示した。S・Aが展開しなかったことで、海外における無気力とは、男子大学生だけに起こる限定的なものとしては捉えられなくなった。その一方で、うつ病や神経症といった精神疾患、パーキンソン病やアルツハイマー、前頭側頭欠損患者といった高次脳機能障害のような特定の疾病の患者に現れる程度の重い症状として無気力が扱われるようになってきている (Clarke et al., 2011; Kos et al., 2017)。海外研究の認識として、無気力は治療すべきものであり、マイナスなイメージを持たれているということが考えられる。

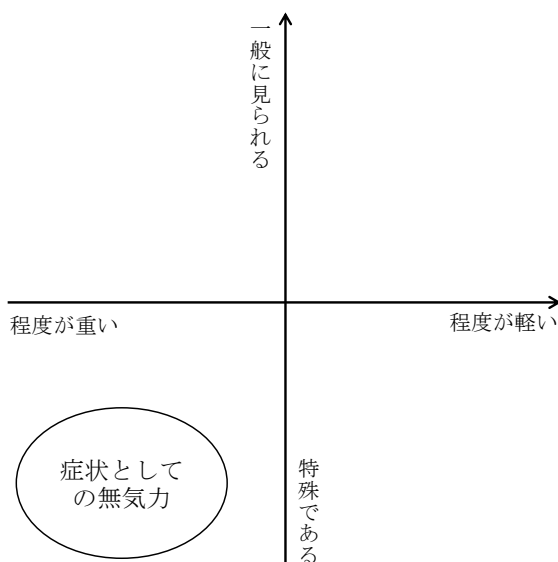


図2 2010年代以降における海外の無気力の捉え方

### 3. 日本における無気力研究

高度経済成長やベビー・ブームの波に伴い、大学の在籍者数は1960年には約50万人だったのが、1970年には約140万人にまで上昇した (文部科学省, 2019)。一方で、大学紛争が活発化し、留年者も急増した。特に1970年度は、学生の無期限ストライキや試験拒否、試験時における機動隊の大学構内への出動などにより国立大学教養部の学生の半数以上が留年するという事態が起こり (松原, 1979), 社会問題化した。1960~70年代における留年の多くは、大学への対抗意識や意思表示としての、意欲的な面が含まれているであろう。だが、こうした留年者の中に、空虚感や無感動を示す、「意欲減退型」の一群が見られることが指摘された (丸井, 1967)。

笠原は、WaltersのS・Aの概念を用いて、部分的特徴の指摘に留まっていた大学生の無気力に関する概念の明確化を行った(笠原, 1977)。笠原はWaltersのS・Aをそのまま引用したのではなく、病前性格に強迫性の視点を加えており、米国とは異なる日本独特のS・Aの特徴を示したと指摘されている(下山, 1996)。米国ではS・Aに陥る男子大学生の特徴として、「力強く、権威的で、過干渉である」父親の存在が示唆されており、成功者であり権威を持つ父親が大きな壁となり、自分の能力に限界を感じることで無気力になると推測されていた(Walters, 1961 笠原・岡本訳 1975)。それに対して、日本では父親が実質的・心理的に家庭において不在であることが一般的である(柏木・2003)。日本におけるS・Aになる大学生の家族の特徴にも、「父親の存在感が薄く父親よりも母親が全権握っている」ことが挙げられている(土川, 1981)。父親がほとんど家庭にいない場合、母親が父親的な役割を果たすために、子どもと情緒的な関わり方をせず、学習関連に偏った知的・攻撃的な関わり方ばかりするようになる(山田, 1992)。つまり、日本では母親が父親の代わりに子どもの壁になっているのである。こうした無気力になる学生の家庭環境の差異も、大学生の無気力が日本独特のものであるという認識に繋がったのであろう。

日本のS・Aの特徴として、男子大学生に見られ、学業に対してのみ選択的に意欲の減退を示し、一方でサークルやアルバイトには積極的に参加する。本人は無気力であることに焦りや不安を感じておらず、留年や退学の危機に瀕して、周りに促されてようやく相談室に赴く(笠原, 1977)。ここまではWalters (1961 笠原・岡本訳 1975) の事例と一致しているが、笠原(1984)はさらに、無気力の特殊な心理状態として、何をしても本当に楽しいという感覚が希薄化すること(アンヘドニア)を強調している。無気力的な行動をとっていることだけでなく、無気力になった学生の内面にも着目しているのである。

海外においてS・Aは流布しなかったが、日本では土川(1985)が一般学生のアパシー化を提言したことで、さらなる展開を見せる。それまでの事例などから無気力の要因が整理され、測定するための尺度も作成された(鉄島, 1993)。臨床場面での事例研究から、調査研究へ無気力研究の中心が移行することになった。神経症の一つとして捉えられていた無気力は、「精神病の無気力と異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対しての意欲の減退を示すこと」(鉄島, 1993)と定義づけられ、精神疾患や神経症とは異なるものとして位置づけられるようになった。無気力になる大学生も、当初は男子大学生に限定して調査が行われていたが(下山, 1995)、女性の進学率上昇に伴い、女性に対しても同じように調査が行われるようになり(福岡, 2000; 下坂, 2001)、女性も男性と同様の無気力を示すことが明らかにされた(本間・松田, 2012)。大学生の男女誰にでも起こり得る身近な問題として、無気力の認識が改められたと言える。

図3に、無気力の程度の重さと、誰にでも見られるものかどうかで、1960年代からの日本の無気力を分類した。笠原(1977)の定義づけたS・Aは、強迫性や完全主義といった病前性格を持つ男子大学生に起こるものであり、症状としては快感の希薄化が見られ、相談室に訪れるごく限られた一群に見られる特殊なものであると考えられる。神経症に分類されていたことから、程度としては比較的重いと言えよう。一方で、一般学生のアパシー化(土川, 1985)以降は、S・A的な無気力ではあるものの、大学生なら性別問わず起こる可能性があり、精神疾患や神経症の症状とは異なるとされている。したがって、程度と

しては軽いと考えられる。

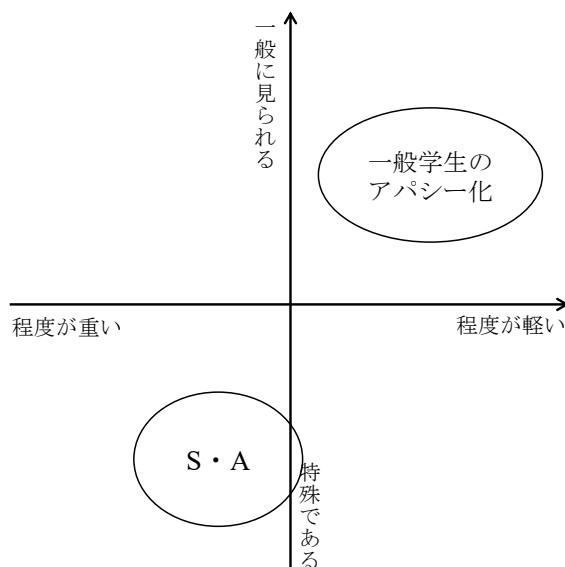


図3 1960～90年代における日本の無気力の捉え方

一般化された無気力研究だが、ふたつの視点の無気力が混合して測定されていると指摘された(狩野・津川, 2008, 2011; 大西, 2016)。一つがS・Aの視点, もう一つは抑うつ  
の視点である。S・Aは先述した通り, 学業に対する選択的な意欲の減退を示すものである。一方で, 抑うつ  
の視点からの無気力研究は, LH理論 (Seligman & Maier, 1967) に関連したもので, 大学生の無気力が抑うつ  
状態と等価的に扱われ, 日常生活全般に対する意欲の減退を示すものである。ただし, 海外の無気力とは異なり, あくまで一般の学生に起こる, 精神疾患や神経症によるものではない意欲の減退を意味している (下坂, 2001)。海外研究ではS・Aが展開されず, LH理論における無気力は, S・Aとは完全に異なるものとして捉えられていた。しかし, 日本では, 大学生の無気力がS・Aとして概念化され, そこにLH理論が加えられる形になったため, このような混合が起きたと考えられる。さらに, 調査の際には, 「授業に出る気がしない」, 「何となく授業をさぼることがある」(下山, 1995) といった無気力によって起こる行動を測定している。快感情の希薄化 (笠原, 1984) といった, 抑うつとは異なるS・A特有の心理的な状態が排除されていることも, ふたつの視点が混ざった要因であると推測される。

図4に, 現在の日本における無気力の捉え方を示した。S・A的な無気力と抑うつ的な無気力は, 完全には弁別されていない。また, どちらも一般学生に起こるものとされているが, より無気力の範囲が広い抑うつ的な無気力の方が, 程度としては重いと考えられる。

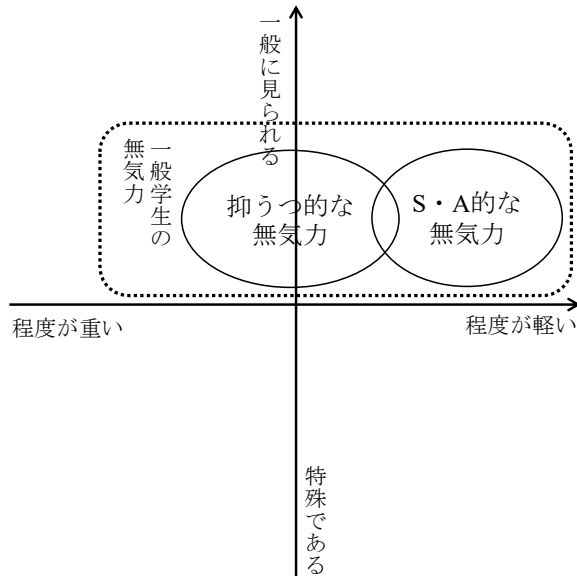


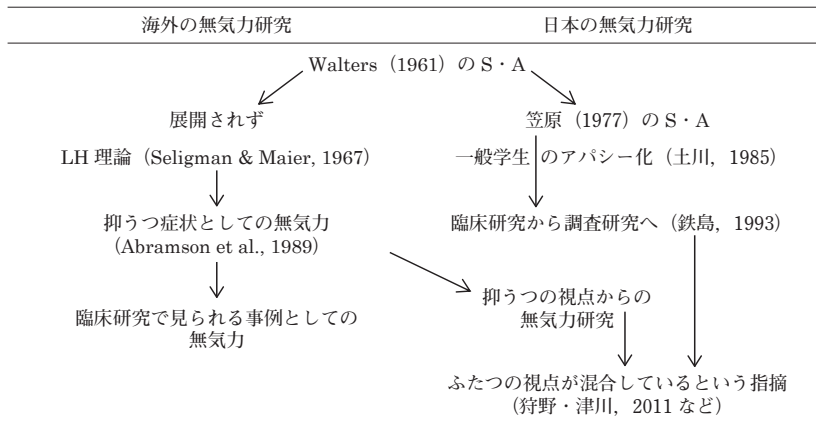
図4 2010年代以降における日本の無気力の捉え方

#### 4. 日本の無気力研究の特徴

ここまで、海外と日本の無気力研究の流れを整理してきた。以下、表1にそれぞれの概略を示した。海外と日本、どちらも共通して、無気力研究は男子大学生の学業に対する選択的な意欲の減退（S・A）が始まりである。そこから、海外では、無気力は大学生特有のものではなく、LH理論（Seligman & Maier, 1967）をきっかけに特定の患者に見られるものとして捉えられている。研究の中心は臨床場面での事例研究であり、無気力になると興味や感情の喪失を示し、動機づけの低下が見られることが挙げられている（Marin, 1991）。無気力が誰に起こるものなのか、どういうものなのか、一貫した定義づけがされていると言える。

それに対して、日本では、大学生特有の学業への意欲の減退を明確化するために、S・Aが取り入れられた。男子大学生のみに見られるものという認識から、大学生の男女誰にでも起こり得るものとして、研究の中心が事例研究から調査研究へと移行した。加えて、学業に限らず、日常生活全般に対する意欲の減退を説明するのに、LH理論（Seligman & Maier, 1967）も関連づけられ、複数の視点から無気力が論じられるようになった。S・A的な無気力は抑うつ状態とは異なる様態を示し、学業に対する選択的退却をする。抑うつ的な無気力は抑うつ状態と同じような様態であり、日常生活全般に対して意欲の減退が起きる。海外のように研究の断絶が無かったために、両者が明確に区別されず、無気力がどのような大学生に起こるものなのか、無気力とはどういうものなのか、曖昧な状態であると言える。

表1 日本と海外の無気力研究の流れ



海外の無気力研究ではS・Aが展開されなかった一方で、日本では現在においてもS・Aの視点から無気力が検討されている。このことから、日本の大学生の無気力は、下山(1995)や山形・繁梲(2003)が指摘していたように、日本の社会的背景に基づいた日本独自の問題であると言えよう。そうした独自のものである無気力の概念を明確化する際に、海外の無気力の概念を引用しているが、元々海外の無気力は特定の条件下の事例によるものであり、一般化した日本の大学生の無気力にそのまま合致するわけではない。そのため、複数の視点の混合や、日本独自の解釈が加えられ、結果として大学生の無気力の実態が不鮮明になっていると考えられる。

以上、海外と日本の無気力研究の比較を通して、日本の無気力は独自性を持つ一方で、海外のような一貫性が見られないことが明らかになった。日本の大学生の無気力は、海外に比べれば程度の軽いものであり、治療するものというよりは改善するものである。S・A的な無気力と抑うつ的な無気力が明確に区別されれば、それぞれの無気力に陥った学生に適したサポートを行うことができるであろう。現在の大学生の無気力の測定では、何に対して意欲の減退が起こっているのかという行動的な部分が見られている。だが、S・A的な無気力も、抑うつ的な無気力も、特定の何かをやらうとしないという行動面では共通している。両者が異なる点は、S・A的な無気力は快感情が希薄化していることや、無気力であることに焦りや不安を感じないといった(笠原, 1977, 1984)、特徴的な心理状態を持つことである。したがって、今後の無気力研究では、無気力的な行動をしているかという点だけでなく、どのような心理状態にあるのかという点にも着目する必要があると考えられる。S・A的な無気力と抑うつ的な無気力を弁別することで、曖昧な状態である大学生の無気力の実態を明らかにすることに繋がると言える。ただし、1960年代から1970年代初頭にかけて、海外と日本とで研究の展開に違いが見られたように、それぞれの国内における社会的背景や国際情勢が与える影響は小さくない。本論でもやや触れたが、十分ではない。今後はこうした社会的要因についても考慮しながら、研究を進めていく所存である。



## 引用文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D.(1978). Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology, 87*, 49-74.
- Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Alloy, L. B.(1989). Hopelessness depression: A theory-based subtype of depression. *Psychological Review, 96*, 358-372.
- Altbach, P. G.(1979). From revolution to apathy: American student activism in the 1970s. *Higher Education, 8*, 609-626.
- Clarke, D. E., Ko, J.Y., Kuhl, E. A., Reekum, R.v., Salvador, R., & Marin, R. S.(2011). Are the available apathy measures reliable and valid?: A review of the psychometric evidence. *Journal of Psychosomatic Research, 70*, 73-97.
- Dable, R.A., Pawar, B.R., Gade, J.R., Anandan, P.M., Nazirkar, G.S., & Karani, J.T.(2012). Student apathy for classroom learning and need of repositioning in present andragogy in Indian dental schools. *BMC Medical Education, 24*(12), 1-8.
- Fox, J.E.(2004). Missing the Mark: Nationalist Politics and Student Apathy. *East European Politics and Societies, 18*, 363-393.
- 福岡 欣治 (2000). 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向——達成動機を媒介要因とした検討—— 静岡県立大学短期大学部研究紀要 14(3), 1-10.
- 波多野 諺余夫・稲垣 佳世子 (1981). 無気力の心理学 中公新書
- Hiroto, D. S.(1974). Locus of control and learned helplessness. *Journal of Experimental Psychology, 102*, 187-193.
- 本間 里美・松田 英子 (2012). ストレッサーと実行されたソーシャル・サポートが無気力に与える影響——大学生における縦断研究—— ストレス科学研究, 27, 64-70.
- 狩野 武道・津川 律子 (2008). 大学生における無気力の分類の試み——スチューデント・アパシーと抑うつ観から—— こころの健康, 23, 2-10.
- 狩野 武道・津川 律子 (2011). 大学生における無気力の分類とその特徴——スチューデント・アパシーと抑うつの視点から—— 教育心理学研究, 59, 168-178.
- 笠原 嘉 (1977). 青年期——精神病理学から—— 中公新書
- 笠原 嘉 (1984). アパシー・シンドローム 高学歴社会の青年心理 岩波書店
- 笠井 孝久・村松 健司・保坂 亨・三浦 香苗 (1995). 小学生・中学生の無気力感とその関連要因 教育心理学研究, 43, 424-435.
- 柏木 恵子 (2003). 家族心理学——社会変動・発達・ジェンダーの視点—— 東京大学出版会
- Kos, C., Klaasen, N. G., Marsman, J.B. C., Opmeer, E. M., Knegtering, H., Aleman, A., & Tol, M.J. V.(2017). Neural basis of self-initiative in relation to apathy in a student sample. *Scientific Reports, 7*, 1-10.
- 李 相蘭 (2000). 青年期無気力傾向に関する比較研究——日・韓の大学生を対象に—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 40, 139-150.
- Marin, R. S.(1991). Apathy: a neuropsychiatric syndrome. *The Journal of Neuropsychiatry and Clinical Neurosciences, 3*, 243-254.
- 丸井 文男 (1967). 大学生のノイローゼ——意欲減退症候群—— 教育と医学, 15, 476-483.
- 松原 達哉 (1979). 大学生の留年の研究 (1) 筑波大学心理学研究, 1, 26-34.
- 文部科学省 (2019). 学校基本調査——令和元年度結果の概要—— 文部科学省  
<[https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt\\_chousa01-000003400\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_chousa01-000003400_3.pdf)> (2020年10月30日)
- 小此木 啓吾 (1979). モラトリアム人間の心理構造 中央公論社
- 大西 恭子 (2016). 学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究 教育心理学研究, 64, 340-351.
- 大島 すみか・石津 憲一郎 (2015). 自我同一性、時間的展望、心理的非柔軟性が大学生の無気力に及ぼす影響について 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 10, 1-10.
- Seligman, M. E. P., & Maier, S. F.(1967). Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology, 74*, 1-9.
- 下坂 剛 (2001). 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究, 49, 305-313.
- 下山 晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 下山 晴彦 (1996). スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究, 44, 350-363.

- 鉄島 清毅 (1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究——関連する諸要因の検討—— 教育心理学研究, 41, 200-208.
- 土川 隆史 (1981). スチューデント・アパシー 笠原 嘉・山田和夫 (編著) キャンパスの症候群——現代学生の不安と葛藤—— 弘文堂 pp.143-166.
- 土川 隆史 (1985). スチューデント・アパシーと生活リズム 教育心理, 33, 771-773.
- 内田 千代子 (2009). 大学生における休・退学, 留年学生に関する調査 第29報 第30回全国メンタルヘルス研究会報告書, 70-85.
- Walters, P. A. J.(1961). Student apathy. In G. B. Blaine, Jr. & C. C. McArthur (Eds.), *Emotional problems of the student*. East Norwalk, CT : Appleton-Century-Crofts.
- (ウォルターズ, P. A. J. 笠原 嘉・岡本 重慶 (訳) (1975). 学生のアパシー 石井 完一郎・笠原 嘉 (編) 現代のエスプリNo.168 スチューデント・アパシー (pp.29-49) 至文堂)
- 山田 和夫 (1992). ふれ合い恐怖 芸文社
- 山形 伸二・繁舩 算男 (2003). 男子大学生のアパシー傾向とCloningerの気質・性格の7次元モデル パーソナリティ研究, 12, 30-31.

## A Study of International Comparisons in University Student Apathy

Masako Hayashi

### Abstract

This study aimed to clarify the characteristics and position of apathy research among university students in Japan by comparing the differences between apathy research overseas and in Japan. Beginning with Walters' report (1961), this article provides an overview of the changes in apathy research from the 1960s to the present, both in Japan and abroad. The results showed that overseas studies on apathy were not developed specifically for university students; rather, they viewed apathy as a symptom observed in specific patients in clinical settings. On the other hand, Japanese studies on apathy regarded apathy as specific to university students. First, it was considered to occur only in male university students, but this perception changed when apathy was susceptible to anyone, male or female, among the general student population. In addition, there was a mixture of Student Apathy, a selective decrease in academic motivation, and Depressive Apathy, a general decrease in motivation in daily life. Compared to overseas research on apathy, Japan's subjects and definitions are vague and difficult to understand. In order to resolve this opacity, it was deemed necessary to focus on Student Apathy's unique psychological state, which is not observed in depressive apathy.